

Title	生活環境ストレスと精神健康：10年間の環状7号線沿道住民の心理社会的ストレス研究より
Sub Title	Living environment stress and mental health : from the ten years' study of psychosocial stress on inhabitants along the loop road 7 in Tokyo metropolis
Author	山本, 和郎(Yamamoto, Kazuo)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	1993
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.36 (1993.) ,p.159- 173
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	30周年記念号
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000036-0159

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

生活環境ストレスと精神健康

—10年間の環状7号線沿道住民の心理社会的ストレス研究より—

Living Environment stress and mental health

—From the ten years' study of psychosocial stress on
inhabitants along the loop road 7 in Tokyo metropolis—

山 本 和 郎*

Kazuo Yamamoto

This paper is summary report on the ten years' study since 1982, of psychosocial stress on inhabitants along loop road 7 in Tokyo metropolis, for investigating the relation between living environmental stress and mental health. The loop road 7 trouble event scale as a measure of psychosocial stress was made on the base of our definition of living environmental stress. The group of inhabitants along the loop road 7 showed consistently higher scores of the trouble event scale and mentally unhealth scale. Significant correlation between trouble event scale and mentally unhealth scale is showed consistently in the ten years' study.

要 約

この論文は、生活環境ストレスと精神健康の関係について、東京都内にある環状7号線沿道住民を対象に1982年より10年間すすめてきた心理社会的ストレス研究についての要約報告である。我々の生活環境ストレスの定義にもとづいて、環状7号線トラブルイベント尺度が作成された。沿道住民群は対象群に比して、一貫してトラブルイベント量も大きく、精神不健康度量も大きく、また、トラブルイベント尺度と精神的不健康尺度とに10年間一貫して有意な相関がみられた。

慶應義塾大学文学部コミュニティ心理学研究室では、生活環境ストレス研究の一つとして、1982年より環状7号線沿道住民の生活環境ストレスとその精神健康に及ぼす影響について研究をつづけている。1992年までに7回の調査を実施した。その調査の経過をふりかえりながら、生活環境ストレス研究のあり方と問題点について検討してみたいと思う。

1. 環状7号線について

環状7号線は、大田区から江戸川区までの都内11区にわたる総延長57.2kmの都道としては最大規模の主要地方道である。この道路は、昭和の初頭、環状6号線、環状8号線とともに、郊外道路として計画されたが、戦前はわずか7.2kmが整備されただけであった。その後、昭和21年に戦災復興院により整備計画が決定され、昭和30年代になると、東京オリンピックに備えて、環7は急ピッチで工事が進められた。東京オリンピックのあった昭和39年には、練馬区、中野区、杉並区、世田谷区、目黒区等を含んだ西半分がほぼ完成、総延長も約35kmと、全体の約3分2が完成した。その後も着々と整備は続けられ、昭和53年までには、葛飾区青砥、江戸川区東小松川、葛西、大田区東海等の約5kmを残すだけとなり、昭和60年1月17日、葛飾区内の青砥橋の完成により、ようやく全線が開通した。

環状7号線は、もともと郊外住宅街を通る牧歌的なイメージをもった郊外道路として計画されていた。しかしながら、昭和30年代に工事が進められた頃には、人口

* 慶應義塾大学文学部教授 (人間科学)

の密集した住宅街や商店街を突っ切る形で建設された上、年々交通量が増加し、しかも産業道路としての性格を強めていった。これまでの調査でも①大型車の混入率(30%以上)が高く、②夜間交通量が多いことが指摘されている。また騒音調査によると75dB Aから78dB Aの騒音量が24時間持続的に発生している。その結果、環7沿道の生活環境は騒音、振動、ほこり、大気汚染等の環境悪化により、沿道住民の被害が生じている。

こうした環状号線沿道環境悪化による住民の被害状況の実態調査や健康調査が東京都により実施されてきている。これと平行して、道路騒音の人体に及ぼす生理的、心理的影響についての基礎研究が行われてきている。我々の研究室は、この基礎研究班の一員として、環状7号線沿道環境が沿道住民の精神健康に及ぼす影響について1982年に着手したのである。

2. 生活環境ストレスの考え方

著者が最初に生活環境ストレス研究を手がけたのは、国立精神衛生研究所時代に「地域精神衛生研究」班の一員として、「都市生活における精神健康に関する総合研究」(昭和47～昭和49年度)(加藤, 1976)に参加した時である。この時、人口過密都市の生活環境がもたらす心理的ストレス量の測定法を計画した。その時の生活環境ストレスの測定に関する基本的考え方は、Holmes, T. H. & Rahe, R. H. (1967)の生活事件(Life Event)の考え方を参考に、生活環境内で発生する生活変化事件を、(イ)地域環境の利便性、保健性、快適性の変化に関する項目、(ロ)職場、学校、近隣、友人、親類等の所属集団内における変化に関する項目、(ハ)生活条件の変化に関する項目、(ニ)家族内人間関係の変化に関する項目の4領域から、139項目選定し生活環境ストレス尺度を構成した。生活変化衝撃の量が大きければ生活環境からのストレス負荷量は大きく、その結果が精神的不健康を増大させる方向に導くというのが仮説であった(山本, 1973)。

その後、高層集合住宅の住環境ストレス研究(山本, 1986, 章204～211頁)に参加して行く中で、生活環境ストレスを、地域生活環境システムが生活主体の生活の場である生活システムを混乱させる度合に基づき測定するという考えに到った。その結果、トラブルイベント尺度(Trouble Event Scale)という形の、住環境ストレス尺度(渡辺1982, 渡辺, 山内1982)、環状7号線トラブルイベント尺度(山本1987)が作製されている。

ここで、地域生活環境ストレスに関して、次のように

定義をしておく(山本1989)。「地域生活環境システムと個人の生活システムの相互作用の中で、地域生活環境システムの機能の減退によって、生活システムのとりくむ生活課題の解決過程に混乱をあたえたり、さらに荷重な生活課題を負荷する時、個人の生活システムにとって地域生活環境はストレスとなる。このストレス源によって生じた生活課題解決の混乱を調整したり、また、負荷された生活課題の解決を行うための地域生活環境システムと生活システム間の相互作用による対処過程が地域生活環境ストレスである。」

この定義で注意すべきことは、ストレス源として地域生活環境を査定するだけでなく、ストレス源によって混乱し、負荷された生活課題の対処を含む過程そのものがストレスであるということである。これはPearlin, I. I., Lieberman, M., Menaghan, E. G., & Mullan, J. T. (1981)のストレスプロセスの考え方が含まれている。

さらに、生活システムと地域生活環境システムについては青井、松原、副田(1971)の生活構造論と松本(1985)の生活体系論をもとに定義した。

生活システムとは「生活主体が自らの社会的地位に典型的な生活様式を維持、発展していくための生活課題を解決する過程において、自らの生活欲求から動機づけられ、自らの生活価値によって方向づけられ、生活諸関係をとり結び、その関係を媒介にして生活諸資源を獲得・変換・享受する生活行為のシステムである」。このように個人側の活生システムをとらえると、環境側の地域生活環境システムは、「生活主体が日常的にとり結び参与している生活諸関係と、それを媒介又は手段として獲得・変換・享受する生活諸資源の集合体である」と位置づけられる。この生活諸関係と生活諸資源の集合体を生活構造と呼ぶことが通常である。この生活構造のサブシステムには、家族生活、職業生活、地域生活がある。著者は、生活構造をあえて地域生活環境システムと呼んだのは、生活構造論でとり上げている社会環境だけでなく自然環境(人工的に保護管理されたものを含む)も地域生活にとって重要な資源なので、これを含んだシステムをとり上げたかったからである。

地域生活環境ストレスの問題にもどらう。つまり、地域生活環境ストレスとは、地域環境システムと生活主体の生活システムとの相互活用の中で生じた不適合度を調整するための対処過程といえる。対処の仕方には、地域生活環境システム内の調整と生活システム内の調整が考えられる。一般に地域生活環境システム内の調整は困難であり、結果的に生活システム側の調整対処の能力が問

われる。この対処過程で処理しきれない負荷が生活システム内の混乱として、不満感、幸福感の低下 (well-being の低下)、心身不健康の発生として顕在化すると考えられている。

3. 環状 7 号線沿道の生活環境ストレスの精神健康に及ぼす影響に関する研究——その 10 年の経過

(1) 第 1 回調査 (1982 年度)

第 1 回調査は、これまでなされた道路騒音の被害調査をもとに、環 7 沿道地域の住民の日常生活に与える騒音の影響、また住民の騒音環境に対する適応について知る目的で調査計画がなされた。調査地区は、環 7 地区として大田区、目黒区、世田谷区の環 7 沿道地区、比較対照地区として品川区を選び、対象者はそれぞれの地区に住む主婦及びそれに相当する女性で、有効回答者は環 7 群 196 名、対照群 185 名である。質問紙による訪問面接調査によって、①道路騒音地区の住民の生活構造、地域社会評価、環境評価、および騒音に対する反応の特徴、②騒音地域に適応を示す人々と不適応を示す人々の間の生活構造、地域社会評価、環境評価、および騒音に対する反応等の特徴を調べた。さらに実験的手法により騒音地域住民の援助行動の特徴を調べた。

結果は、環 7 地区は、対照地区より環境をあまり快適なものとはみておらず、同一地域内でも、生活構造、地域参加の特性などによって個人差が生じている。そして、環 7 に近いほど騒音の被害感大きく、環 7 地区は対象地区と比べて、永住意識、生活満足度が低い。また、環 7 地区の対象者を心身の自覚症状の量によって適応群、不適応群としたところ、適応群の環境に対する評価は積極的なものであり、それに対する不適応群の評価はかなり不快で消極的なもので騒音に対する被害感においても邪魔感、さしざわり感の程度が大きい。予想されていた地区による援助行動の発生についての差はみられなかった。

この第 1 回の調査は、これまでの道路騒音調査を参考にしている、全く外側から、その被害状況を大まかにとらえることしかできてなかった。ともかく被害感に個人差が大きいことが分かったが、その被害の中味について何もとらえることができていないことを知った。そこで、沿道住民がどのような体験をしているか直接聞く必要を感じた。

(2) 第 2 回調査 (1983 年度)

第 2 回調査は調査対象に、第 1 回調査における環 7 直

面群の中から「適応群」(地域生活満足度が高く、自覚症状が低いもの 25%, $n=18$)、「不適応群」(地域生活満足度が低く、自覚症状が高いもの 25%, $n=19$) を選び出し、結果的に調査に応じた「適応群」10 名、「不適応群」8 名を調査対象とした。そして、どのような要因がそこでの生活に対する適応、不適応を起こさせるのかを探るため、深層面接法 (Depth Interview) による各 2 時間の面接調査を行った。

その結果、適応群はいわば「住めば都」の心境、それに対して不適応群は「住まば都」の心境もっていることがわかった。つまり、適応群の人々は、道路騒音、振動、排気ガスなどに悩まされていても、経済的に余裕がないため転居ができなかったり、高令のため新しい土地に移り住むエネルギーもなく、長年住み慣れた土地に対する愛着が強かったりして、ことさらに利便性を強調したりすることによって今住んでいる所は良い所なのだと思分に云い聞かせているようである。それに対して不適応群の人々は、比較的若い主婦などが多く、転居したいという意志もまたその可能性もあるが、今はできない事情がある、といった人が多かった。

この第 2 回調査において、深層面接による環 7 沿道住民の被害状況を具体的に聞くことができたことが最大の収穫であった。環 7 は騒音による被害以上に、振動、排気ガスによる被害が大きいことを知った。この第 2 回調査は、その後の調査の重要な指針を与えるものとなった。つまり、同じような環境にさらされていても、そこでの生活に適応するかどうかは全くの個人差であり、地域生活に対する満足度や永住意識、転居資金準備可否などが影響するのではないかと考えられた。また個人のパーソナリティ特性の影響などについても考えられ、次回の調査では欲求不満耐性との関係を調べることにした。さらに、道路騒音などの道路から物理的刺激が直接ストレスラーとして働くというよりも、それらによって生じる生活混乱に関する出来事が心理的ストレスラーとしての意味をもってくると考え、面接によって得られた生の声から「環 7 沿線トラブルイベント」76 項目を作製し (表 1)、その後一致して使われることとなる環 7 道路公害ストレス尺度を構成した。次回の調査より、この生活システムの混乱が、生活環境ストレスであるという概念が明確に盛り込まれることとなったのである。

(3) 第 3 回調査 (1984 年度)

第 3 回調査では、環 7 に直面して住む人だけを対象とし、そこに住む人のストレス感と他の要因との関係を分析することによって、どのような人がストレスを感じやす

表1 環7沿線トラブルイベント項目

順位	番号 ¹⁾	トラブルイベントの内容	報告率 ²⁾
1	37	夏場や夜の暴走族の音がうるさい	89.6
2	*12	大型車が通ると家の振動が激しい	86.8
3	*13	とくに明方大型車が通る音がうるさい	86.2
4	*20	空気がにごっていて臭い	84.3
5	50	右翼やその他の宣伝カーがうるさい	81.4
6	41	地震の時、避難所までたどりつけるか心配	81.2
7	*21	窓を開けると砂ぼこりがひどい	81.1
8	*28	砂ぼこりがひどく、部屋の掃除や窓のレールの溝の掃除が大変	80.0
9	*25	洗濯の竿竹やヒモがすぐに真黒になる	79.5
10	54	たまに来る客や親戚の人は泊まると眠れない	79.5
11	*24	家のまです渋滞することが多く、いっせいに動く時の排ガスがひどい	77.6
12	41	ここで子供を育てると子供の性格や健康によくはないのか心配	73.0
13	*22	砂ぼこりがひどく、一日で廊下やジュースが汚れる	70.3
14	48	何かあって助けを求めても聞えないのではないかと思う	70.0
15	72	クーラーの電気代、電燈代、家の修理代など余計な出費がある	70.0
16	39	地震の時、環状七号線を走る車から火がでるのではないのか心配	69.5
17	14	道路に継目ができ、それがドカドカと振動する	68.9
18	46	家の前で交通事故がよくおこる	68.4
19	55	植木が真黒になったり、枯れたりした	67.6
20	*20	洗たくものを干しっぱなしにできない、かわくとすぐ入れる	66.5
21	*22	窓を開けた暮しをしたいと思うができない	66.2
22	57	鉢ものや草花が元気がなくなったり、だめになった	66.2
23	5	電話で話したり受けたりするたびに、窓を閉めたり、戸を閉めたりしないとだめ	65.7
24	60	小さい子供は、あぶなくて、1人で外に出せない、目がはなせない	65.5
25	7	TVの画面がゆれたり、ラジオやTVにタクシーの交信が入ったりする	63.5
26	*2	話しをしている時相手の話し声がききとれない	63.5
27	*24	排ガスで、店や部屋の中が、油汚れする	62.2
28	*19	振動で、窓や壁にスキ間ができた	61.4
29	65	道路工事をしょっ中するのでうるさい	61.4
30	*11	本や新聞を読んでいる時「あうるさいな」と思う	60.8
31	*39	自然の風を入れたいのに窓を開けられない	60.5
32	40	地震の時、近くのガソリンスタンドが心配	59.7
33	63	信号の前なので、または最近信号がついて、音と排ガスがひどい	59.2
34	*15	時々、つき上げるような振動がある	57.6
35	1	会話がとぎれることがある	57.6
36	49	近くに病院や消防署があるので車のサイレンがうるさい	56.8
37	4	電話がうまく聞きとれない	55.7
38	6	電話が鳴っていても、隣の部屋や風呂場にいると聞えない	55.1
39	62	子供の安心して遊べる場所がない	54.9
40	47	泥棒が入っても気がつかなかったり、気がつかないのではないのか心配	54.1
41	*24	TVのある部屋や、子ども部屋は夏でも窓をあけられない	54.1
42	*20	ワイシャツやエリが真黒になる	52.4
43	*18	振動で、窓ガラスがガタガタ音をたてる	51.4
44	76	何でこんなとこに住まなきゃならないのか、ふと情なくなることがある	50.8
45	10	地盤がわるく、家がしょっ中ゆれている	50.5

表 1 の 続 き

順位	番号	トラブレイベントの内容	報告率
46	*⑤	客が来ても玄関で話せず, 中に入れないと話ができない	50.3
47	⑦⑤	信号などで車がいっせいに止り, シーンとすると変な感じになる	49.5
48	⑩	昼間でも本を読む時は戸を閉め電気をつけて読む	48.7
49	66	環七の反対側に行くのに不便をする	47.6
50	35	熱帯夜のときは, 窓を開けざるをえない	46.2
51	⑬	振動で, 食器棚の食器, 仏壇, タンスのとってがガタガタゆれる	45.4
52	⑦①	地盤がわるく, すぐに道路に段差ができ, ガタンガタン音がする	45.4
53	⑧	TVはボリュームを最大にしないとよく聞きとれない	42.2
54	17	風呂のタイルにひびが入った	41.6
55	⑧⑥	クーラーを入れているが, ききすぎたりして不愉快	35.1
56	③	どなりあいのような話し方になる	34.9
57	⑤②	郵便屋さんが来ても, 声が聞えず, 留守だと思って帰ってしまう	34.6
58	31	洗濯ものを家の中に干すようにしている	34.1
59	73	騒音がネックで家, マンションが売りにくい	33.2
60	⑨	深くものが考えられない	31.6
61	⑬⑤	車やトラックが家に飛びこんでくるのではないかと心配	29.5
62	29	洗濯ものに黒いものがつくと, いくら洗ってもとれない	29.2
63	②③	子どもが黒いハナクソを出す	28.9
64	⑬④	洗濯機のホースがはずれ水が流れてでいることに気がつかなかった	28.4
65	⑦④	環状七号線側の部屋が使えず不便をしている	26.8
66	67	まわりにマンションが建ち, 近隣関係がなくなった	24.3
67	56	実のなる木(柿など)が実がならなくなった	22.7
68	42	赤ん坊や子どもが泣いても聞えない	20.9
69	68	隣のマンション建設のための工事の音と振動が大変	19.7
70	58	金魚や小動物が元気がなくなったり, 死んだりした	19.5
71	27	子どもの目ヤニがひどい	18.7
72	38	近くに暴走族のたまり場がある	18.4
73	53	客と玄関のインターホーンで話しても聞えない	14.9
74	69	親しかった近所の人が, 御主人が亡くなると立ちのいてしまった	13.2
75	44	車やトラックが家にとびこんできたことがある	8.92
76	59	犬やネコが元気がなくなったり, 死んだりした	8.38

1) 番号は第3回調査(1984年度)で使用した質問紙項目の番号

*の項目は第4回(1987年度)で使用した20項目

○で囲んだ項目は第5回(1988~1989年度)で使用した50項目

2) 報告率は, 第3回調査時, 沿道住民370名が「あり」と回答した率。

いかを採ったものである。そのため, 今回初めて生活環境ストレス理論を導入し, 前回の調査によって得られたトラブレイベント尺度を使用し, そのトラブレイベントを経験した個数及びそれらに対する5段階評価によるイライラ度の得点化によってストレス量を測定した。調査対象者は, 板橋区, 練馬区, 中野区, 杉並区, 目黒区, 大田区の6区で環7に直面して住んでいる主婦582名で, 質問紙による訪問面接調査を行った(回収数443

名, 有効回答数370名)。

その結果, ①環7沿線トラブレイベントと不健康状態との相関はかなり高く, トラブレイベント総得点*と不健康尺度(精神的不健康を示す心身症状33項目, 表2

* 総得点とは, トラブレイベント「なし」—0点, 「ある」と答えた場合, 「そんなに気にならない」—1点, 「少し気になる」—2点, 「少しイライラする」—3点, 「イライラする」—4点, 「非常にイライラする」—5点, とし, 評点の総和である。

表 2 精神不健康尺度 (第 3 回調査で使用)

- | | |
|----|-------------------------|
| 1 | 耳鳴りがする |
| 2 | 風邪を引き易い |
| 3 | 息苦しくなる |
| 4 | 胸か心臓部に圧迫感がある |
| 5 | 激しい動悸がある |
| 6 | 食欲がない |
| 7 | 胃の具合が悪い |
| 8 | 便秘がつづく |
| 9 | 首筋や肩がこる |
| 10 | 発汗が多い |
| 11 | 頭が重い |
| 12 | しばしばめまいがする |
| 13 | じっとしておれない |
| 14 | 疲れてぐったりする |
| 15 | 朝起きると疲れを感じる |
| 16 | 寝付きが悪い |
| 17 | 夜中に目が覚める |
| 18 | 熟睡感がない |
| 19 | 気が散りやすい |
| 20 | 何となく不安である |
| 21 | いらいらする |
| 22 | 人を避けたくなる |
| 23 | いきいきとした感じがしない |
| 24 | 気がめいる |
| 25 | 気分のむらがある |
| 26 | 健康のことが気になる |
| 27 | 最近、人を疑い深くなった |
| 28 | 最近、家から外へでることが少なくなった |
| 29 | 何もする気になれないことがよくある |
| 30 | 突然大声をあげてみたい衝動にかられることがある |
| 31 | 追われている感じがある |
| 32 | 重たいものをしゃわされている感じがある |
| 33 | 耳が遠くなった感じ |

参照)の合計得点との相関は $r=.66$, トラブイベントの個数と不健康度との相関は $r=.63$ であった。②トラブイベントの経験と関係のある変数とは、住居形態、欲求不満耐性、永住意識、転居資金準備の可否、不定期外出の頻度で、トラブイベントを多く経験する人の条件とは、独立住宅に住む、欲求不満耐性が低い、仕方がないから住んでいる、転居資金を準備できない、不定期的な外出が少ないということであることがわかった。さらに、生活満足度の低い人はイライラ度が高いこともわかった。

この調査で注目したいのは、トラブイベント尺度と精神不健康尺度の相関がきわめて高いことである。Lazarus, R. S. & Folkman, S. (1984) の日常性混乱 (Daily Hassles) の概念にもとづくストレス尺度と精神不健康度の相関は .55 から .66 を示している (Kanner, A. D., Coyne, J. C., Schafer, C. & Lazarus, R. S. 1981)。この数値を根拠に、Lazarus らは日常性混乱の尺度は Holmes, T. H. & Rahe, R. H. (1967) 及び Dohrenwend, B. S. & Dohrenwend, B. P. (1974, 1981) の生活事件尺度よりも (この場合に .2~.3 程度) 精神不健康予測率が高い故、ストレス尺度としてより有効であることを主張している。これに対し、Dohrenwend, B. S. & Dohrenwend, B. P. (1984) は Lazarus らの日常性混乱尺度の内容と精神不健康度尺度の内容が、どちらがストッサーでどちらがその結果としての症状か区別がつかない混同 (confound) があるので、両者の相関が高くなるのは当然であると批判している。この混同について、Lazarus は、Dohrenwend らは刺激-反応という直線因果論モデルにこだわっているからでてくる批判であり、自分たちはシステム論的円環的因果論モデルで考え、さらに具体的な文脈の中で考えているのでその批判は当たっていないと主張している (ラザルス, R. S. 1990)。

こうした論争を念頭に入れ、第 3 回の調査結果のトラブイベント尺度と精神不健康尺度の相関の高さは、Dohrenwend らのこのような混同が生じる可能性があるともみなされた。それ故、次回の調査では、精神不健康に関する項目であっても、できるだけ身体症状で表現されている CMI の中の C, I, J, 30 項目を採用して追究してみることを考えた。

(4) 第 4 回調査 (1987 年度)

第 4 回調査では、環 7 からくる公害ストレッサーがどの程度住民に影響を与えているかをより細かくみていくために、まず対象者を前回のように環 7 に直面している人だけに限定しないことにした。環 7 に直面して生活している人 (直面群) に加えて、道路から 50 m 離れて生活している人 (50 m 群)、つまり道路からの影響は十分に少なくなるが (道路騒音量は 15 m 内部に入ると通常値になることが騒音測定でわかっている)、他の条件はそれほど異ならないであろうと思われる所に住む人々を対照群として設定した。対象地区は、大田区、板橋区、葛飾区で、直面群、対照群それぞれ 260 名であった (有効数は直面群 166 名、対照群 185 名)。また前回のトラブイベント尺度の簡略化をはかり、標準化された精神

健康尺度との相関をみていくことにした。そのため、前回の調査データを主成分分析することによって得られた第一主成分に負荷量の高い項目、20項目を新しくトラブルイベント尺度とし、これまでの独自の不健康尺度にかわって、CMIから選ばれたC.I.J. 30項目を新たな不健康度を測る尺度として採用した。調査方法は質問紙による訪問留置調査である。

結果は以下のとおりである。

- ①対象者の属性で多かったのは、住居に関しては、直面積群では集合住宅、鉄筋住宅、店舗兼用住居、50m群では、独立家屋、木造住宅、住宅専用であって、職業に関しては、直面積群では通勤、50m群では専業主婦であった。
- ②意識項目では、直面積群は50m群に比べて、永住意識も、地域生活満足度も低いという傾向がみられた。
- ③パーソナリティでは欲求不満耐性、騒音感受性ともに群間における差はみられなかった。
- ④健康状態は、群間では有意義はなかったが、トラブルイベントは直面積群の方が、合計点、個数ともに有意に高かった。
- ⑤トラブルイベントとCMIとの相関がみられ、直面積群の方が50m群よりも高い相関であった。(CMIとの相関係数、トラブルイベントの総得点とでは直面積群、.34、50m群 .29、トラブルイベントの個数とでは、直面積群 .31、50m群 .26)。
- ⑥一番困っていること(自由回答)の結果は、直面積群では排気ガスに関するものであった。

この第4回調査によって、直面積群と50m群の属性、

意識の違い、そしてトラブルイベントの群間における差や、トラブルイベントとCMIとの関係なども明らかにされ、各変数の関連が次第におかかってきたが、属性や意識がトラブルイベントやCMIとどのように関係しているかなどの結論は得られず、今後の課題となった。

(5) 第5回調査(1988年度、1989年度)

第5回調査では、環7が沿線住民に与える影響が、時間の経過において安定したものなのか、変動するものなのかを探るため、今まで見落とされてきた時間変数を考慮に入れた。そのため同一の対象者に対して、同じ質問を一定期間(この場合2ヶ月間)を置いた後に施行するといったパネル調査を行った。対象者は、大田区在住の女性(主に主婦)で、環7に直面積した沿道地区に住む「直面積」237名、環7から少し離れた閑静な住宅街に住む「対照群」223名の、計460名であった。調査方法は、質問紙による郵送法で、第1次調査の質問紙の発送後は、2ヶ月間隔で計4回にわたって実施した。その後、第2次調査以降は、前回返信のあった対象者にのみ質問紙を発送した。回収結果は、表3のとおりである。なお、使用したトラブルイベント項目は50項目(表1参照)、不健康尺度は前回と同じくCMIのC.I.J. 項目30項目である。

結果は以下のとおりであった。

- ①対象者の属性は群別で大きな違いがあり、直面積群に関しては、職業では自営業、パート、住居形態では集合住宅、家屋素材では鉄筋、家屋の使用形態では店舗兼用の占める割合が多く、対照群では、主婦、独立住宅、木造家屋、住宅専用が多い。

表3 第5回調査(1988~1989年度)回収結果

発 送 日		第 1 次	第 2 次	第 3 次	第 4 次
		'88. 10. 15	'88. 12. 13	'89. 2. 15	'89. 4. 15
発 送 数	直 面 群	237	137	112	97
	対 照 群	223	136	102	96
	計	460	273	214	193
返 信 数 (回 収 率)	直 面 群	137(58%)	112(82%)	97(87%)	96(99%)
	対 照 群	136(61%)	102(75%)	96(94%)	92(96%)
	計	273(59%)	214(78%)	193(90%)	188(97%)
有 効 回 答 数 (有 効 回 答 率)	直 面 群	117(85%)	106(95%)	90(93%)	88(92%)
	対 照 群	117(86%)	98(96%)	90(94%)	89(97%)
	計	234(86%)	204(95%)	180(93%)	177(94%)

②意識項目に関しては、直面群の方が、対照群より積極的に転居を望んでおり、地域満足度も低い。転居資金準備の可否については群間で差がみられない。また、この地域生活満足度は、直面群においてのみトラブルイベント ($r=.25$) と CMI ($r=-.33$) とに有意な相関を示している。つまり、直面群において地域生活満足度の高い人は、トラブルイベントも少なく、健康であると考えら

れる。

③自由回答による地域生活に対する満足、不満足の原因は、群間で大きく異なる。直面群では満足の理由として交通や買物などの利便性を挙げる一方で、不満の原因として騒音、排気ガスなどの道路公害を挙げている。つまり、直面群の人口は、環7から被害を受けているだけではなく、利便性といった恩恵も受けていると考えられ

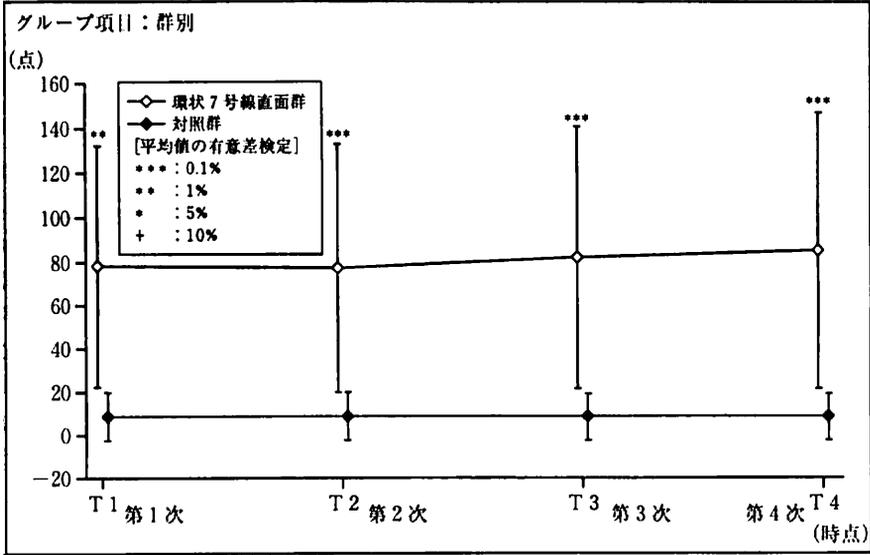


図 1 トラブルポイント総得点の各時点での平均点

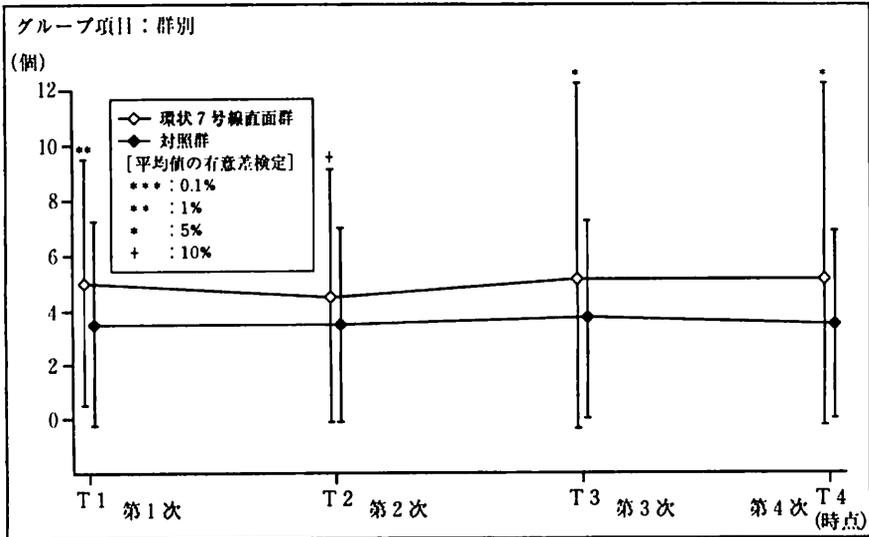


図 2 CMI 得点の各時点での平均点

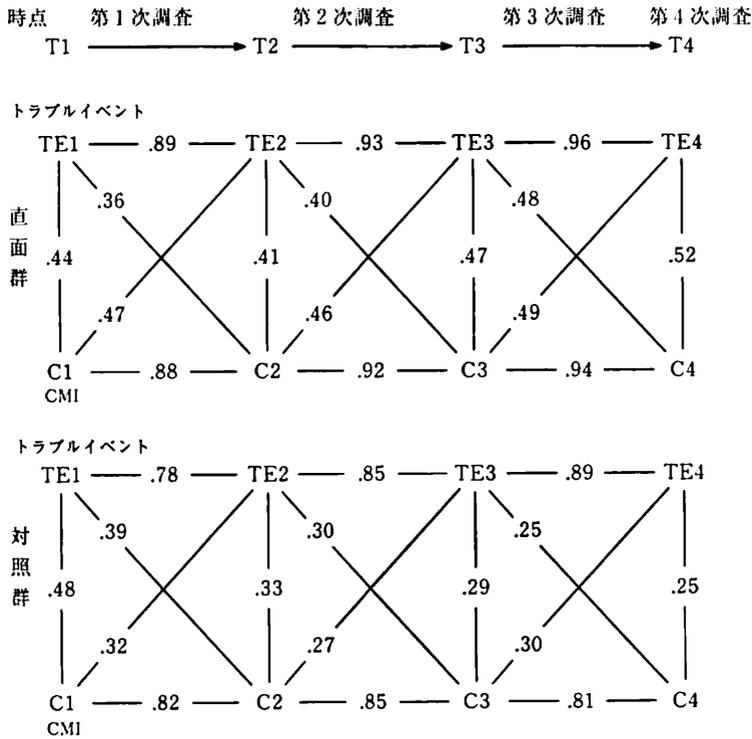


図3 各時点でみたトラブルイベント得点と CMI 得点の相関関係

る。一方、対照群では不満の理由として顕著なものはなく、満足の理由として主に環境の良さを挙げた人が最も多い。

④尺度の信頼性については、騒音感受性（岩田 1981 の尺度を採用）、欲求不満耐性、トラブルイベント、CMI に関してはどれも α 係数が 0.8 を大きく越えており、その信頼性が確認された。

⑤パーソナリティ要因では、騒音感受性得点は直面群の方が有意に高く、欲求不満耐性には群間における有意差はみられない。また、騒音感受性は両群で CMI と有意に高い相関を示したが、トラブルイベントとは直面群においてのみ有意に非常に高い相関がみられた。一方、欲求不満耐性は、対照群においてのみ有意な相関がみられた。

⑥トラブルイベント総得点も、得点も、CMI 第 1 次調査から第 4 次調査まで、群別に関係なく、平均点、標準偏差の変化はほとんどみられず、自己相関も非常に高い。そして、トラブルイベント総得点は直面群の方が 0.1% 水準で常に有意に高い値を示し（図 1）、CMI 得点においても直面群の方がやや高くなっている（図 2）。

⑦トラブルイベント総得点と CMI 総得点の相関は、各時点で両群とも有意に高い。（直面群では $r = .41 \sim .52$ 、対照群では $r = .25 \sim .48$ ）。よって、トラブルイベントと CMI の関係は群別や時間の経過によって異なるものではなく、変化のない安定した構造をもっていると考えられる（図 3）。

⑧騒音感受性とトラブルイベントで CMI の予測を行うと重相関係数が高まり、騒音感受性が不健康度の予測に役立つことがわかった。

以上のように、4 回にわたって行われたこの第 5 回調査ではストレス過程の構造には変化がみられず、直面群における環 7 による道路公害は慢性的なストレスャーとなっているようである。この調査では 2 ヶ月間隔という時間経過による変化はみられなかったが、パーソナリティなどの媒介要因の働きや、トラブルイベントと CMI の相関が確かとなったことは意義が大きいといえるだろう。

(6) 第 6 回調査 (1990 年度)

第 6 回調査は、前回の調査結果に関してさらに詳細な分析を行うべく、その第 1 次調査のデータをもとに行っ

た研究である。よって、調査対象、調査方法などは第5回調査と同様である。以下のことを明らかにすることがその目的である。

- ①トラブルイベントが何をはかっている尺度であるか。
- ②トラブルイベントと CMI それぞれのその他の変数との関係。
- ③トラブルイベントと CMI との相関における個人差、そこで、トラブルイベント高得点/低得点、CMI 高得点/低得点による4類型に属する人の特性について調べる。

そして、結果は以下のとおりである。

- ①トラブルイベントと CMI と直面群、対照群の群別との関係の構造は、トラブルイベント総得点と群別、トラブルイベント総得点と CMI 得点、CMI 得点と群別の順に関係性は強い。また、トラブルイベント得点と CMI 得点との関係の構造は、群によって全く異なっており、直面群ではトラブルイベント、CMI ともに高得点である人が多いのに対し、対照群ではトラブルイベント、CMI ともに低得点である人が最も多い。
- ②トラブルイベントのイライラ度の感じ方は、標準偏差によると、直面群においては個人差が大きい。
- ③トラブルイベントの平均総得点が CMI の高/低(不健康度)によって差がみられるのは、トラブルイベント 50 項目中、直面群では 45 項目、それに対して対照群ではたった6項目である。また、トラブルイベント 50 項目の直面群と対照群の群別の平均得点に有意な差がみられた項目数をみると、CMI 低得点群(健康群)では 50 項目中 39 項目であるのに対し、CMI 高得点群(不健康群)では全項目である。つまり、トラブルイベントのイライラ度の感じ方が不健康度によって差がみられるのは、主に直面群であり、不健康群の方が群別によって感じ方に差がみられるということである。
- ④トラブルイベントを因子分析した結果、I軸「振動」、II軸「外部からの侵入への不安感」、III軸「音による弊害」、IV軸「密閉不満感」の4軸が抽出された。因子負荷量の大きい順に選ばれた各軸を代表するものは以下のとおりである。

I軸「振動」

「大型車が通ると家の振動が激しい。」

「車が通る時の振動で、窓や壁にスキ間ができた。」

II軸「外部からの侵入への不安感」

「車やトラックが家に飛び込んでくるのではないかと心配になった。」

「泥棒が入ってきて、騒音で気がつかないのではないかと心配になった。」

III軸「音による弊害」

「車がうるさくて深くものが考えられないことがあった」「郵便屋さんが来ても、うるさくて声が聞こえず、留守だと思って行ってしまったことがあった。」

IV軸「密閉不満感」

「窓を開けた暮らしをしたいと思うが、道路の騒音や排気ガスのためできない。」

「電話で話したり受けたりするたびに、窓を閉めたり、戸を閉めたりしないとだめである。」

そして、群別、及び CMI 得点によって最もトラブルイベント得点に差がみられたのはI軸「振動」であり、次に群別で差がみられたのはIV軸「密閉不満感」である。

⑤健康群/不健康群による差がみられた変数は、直面群では、年齢、騒音感受性、地域生活満足度、対照群では、騒音感受性、欲求不満耐性、居住年数である。つまり、直面群において健康な人は年齢が低く、騒音感受性が低く、地域生活満足度が高い人で、同様に対照群においてはやはり騒音感受性が低く、欲求不満耐性が高く、居住年数が短い人である。また、トラブルイベント高得点群/低得点群による差がみられたものは、直面群では、騒音感受性と地域生活満足度、対照群では、地域生活満足度のみである。つまり、直面群においてトラブルイベント得点の高い人というのは騒音感受性が高く地域生活満足度が低い人で、対照群においても地域生活満足度が低い人である。

⑥直面群には4類型の人がとらえられる。つまり、「健康・トラブルイベント高得点群」の人々は、昔からこの地域に住む人、自営業が多く、地域が生活に根差しているにもかかわらず、地域生活満足度が低く、トラブルイベントもかなり感じている。しかし経済的には転居が可能である人がかなりいても、ほとんどの人は転居はしないと考えている。一方「健康・トラブルイベント低得点群」は、鉄筋の集合住宅に住む若い人が中心で、自営業者はほとんどいない。トラブルイベントはある程度は感じているが、地域の利便性の方を評価しており、地域生活満足度も他のグループに比べて高い。転居に関しては経済的にはかなり苦しい人が多いが、不満を持ちながらあきらめているよりはむしろ、その地域に住むことを積極的にとらえている。また、「不健康・トラブルイベント高得点群」の人々は、直面群では平均的な生活を送っており、住宅環境とライフスタイルにおいては特別な傾向にみられない。しかし、パーソナリティ特性において騒音感受性がとても高く、地域生活満足度がとても低い。そのためトラブルイベントを非常に感じていて、実

際に環7対策の援助を受けている割合も高く、転居を予定している人もいる。最後に「不健康・トラブルイベント低得点群」は、仕事をもった比較的年の高い人が中心である。仕事のため、外出時間が長く、環7に接する時間が短い傾向にあり、騒音感受性も低い。そして地域生活満足が高く、転居を考えている人も少ない。よって、トラブルイベント得点が低くなっているのであろう。

⑦住宅環境においてトラブルイベント得点に有意差がみられたものは、住宅形態、家屋素材、築年数で、それぞれ独立、木造、長い方が高得点である。また、CMI得点に有意差がみられたものは、家屋素材で、木材の方が高得点である。

⑧パーソナリティ特性においてトラブルイベント得点、CMI得点がともに有意に高かったのは、年齢が高く、騒音感受性が高く、地域生活満足度が低い場合である。また、ライフスタイルにおいてはトラブルイベント、CMI得点ともに有意差はみられず、あえて云うと職業において専業主婦、パート、通勤、自営業の順でトラブルイベント得点が高い。

⑨騒音感受性の高い人は、独立家屋の木造の建物に住み、年齢が高く、地域生活満足度が低い。また地域生活満足度に関しては、住宅環境やライフスタイルにおいては有意差はみられず、騒音感受性においてのみ差がみられた。

以上のように、この今回の分析によってトラブルイベントが何をはかっているのか、その代表的な項目は何か、そして、そのトラブルイベントやCMIと各変数との関係などが明らかになった。直面群、対照群によってトラブルイベントやCMIの構造も異なるし、環7沿線という同じ環境にさらされていても、住宅環境、年齢、騒音感受性、地域生活満足度等によってトラブルイベントの感じ方、不健康は異なり、個人差がかなりあることがわかった。

第7回調査(1991年度)

これまでの調査、とくに第3回調査以後は環7沿線トラブルイベント尺度を中心に研究がなされてきたのであるが、この尺度を前面にうちだして調査することに次のような疑問が出された。即ち、このトラブルイベントを提示することで、環状7号線のもたらす被害に対して意識的に注意を集中させ強調させているのではないかという疑問である。普段それほど被害を意識していないのに、あらためて環状号線からこのような被害をうけていないでしょうかと問い正せば、沿道住民は「ある」と答えるだろうし、イライラ度も高いと答える傾向を強める

だろう。それ故、トラブルイベント総得点とCMIの不健康度の相関も高くなるだろう。

そこで、環状7号線からの被害を調査しているということ意識させず、広く、地域生活環境のもたらす生活システムの混乱度を測定し、それをストレス度として研究してみたならばどうなるかということで第7回調査は出発した。

環7沿線トラブルイベントのかわりに、生活全般トラブルイベントを作成した。山本(1974)で用いられた「社会的ストレス尺度」139項目から、①変化出現率の少なかった項目、②大変さの程度が極端に低かった項目、③他の項目に併合させることが可能な項目、④現代の都市生活にそぐわないと思われる項目、⑤プライバシーを害する恐れのある項目をとり除き、最終的に58項目にし、そこに前回の調査で抽出された8項目の環7沿線トラブル項目を加え、66項目の生活全般トラブルイベントを構成した。不健康尺度は前回と同じくCMIのC.J.J30項目である。

有効回答は対象群140名、対照群205名である。対象者の層性は、前回調査と同じ傾向を示している。

生活全般トラブルイベントを中心にその結果をまとめると、

①生活全般トラブルイベントを因子分析した結果、次の4因子を抽出した。

【第1因子：環境軸】

固有値 7.71 寄与率 29.0%

因子寄与 5.66 第1~4因子における寄与率 37.3%

第1因子に負荷量の高い項目には、環状7号線トラブルイベント8項目(○で囲んだ項目)をはじめ、地域環境の変化に関する項目が入る。生活全般トラブルイベントの分散は、この第1因子によって約3割が説明される。因子負荷量0.40以上の11項目と、その負荷量を以下に示す。

No. 2 家のまわりの空気がかなり悪くなったり、光化学スモッグが発生したりした。 0.631

No. 3 近所で鉄道、道路、ビルなどの建設計画がもち上がった、実際に工事があった。 0.645

No. ④ 車がうるさくて深くものが考えられないことがあった。 0.744

No. ⑦ 窓を開けた暮らしをしたいと思うが、道路の騒音や排気ガスのためできない。 0.728

- No. ⑪ 郵便屋さんが来ても、うるさくて声 0.446
が聞こえず、留守だと思って行って
しまうことがあった。
- No. ⑫ 大型車が通ると家の振動が激しい。 0.707
- No. ⑬ 車やトラックが家に飛び込んでくる 0.472
のではないかと心配になった。
- No. 18 近所で交通事故や火事などがあつた。 0.683
- No. ⑭ 泥棒が入ってきて、騒音で気がつ 0.629
かないのではないかと心配になった。
- No. ⑮ 車が通る時の振動で、窓や壁にスキ 0.675
間ができた。
- No. 48 電話で話したり受けたりするたびに、 0.696
窓を閉めたり、戸を閉めたりしない
とだめである。

これらの項目から第1因子の解釈を行ない、「環境軸」と命名した。また、この11項目を合わせた尺度を、新たに「環境軸トラブルイベント」とする。

【第2因子：子供軸】

- 固有値 3.42 寄与率 12.9%
因子寄与 3.60 第1~4因子における寄与率 24.0%
第2因子に負荷量の高い項目には、子供に直接関係する出来事、また、間接的に関係すると思われる出来事が含まれている。

第2因子に負荷量 0.40 以上の8項目を以下に示す。

- No. 28 子供の進学のことで苦労した。 0.502
- No. 29 子供の勉強が急に忙しくなったり、 0.470
または成績に大きな変化があった。
- No. 30 子供に家庭教師をつけたり、塾や習 0.599
いごとに通わせるようになった。
- No. 31 子供の友人のことで困ったことがあ 0.470
った。
- No. 32 PTAや学校のことで急に忙しくな 0.475
ったり、困ったことがあった。
- No. 42 部屋の配分や使い方について問題に 0.483
なったり、困ったりした。
- No. 53 家計費のどれかの部門（住宅費、教 0.440
育費、交際費など）が急に増えるよ
うになった。
- No. 63 子供が言うことを聞かなくなってきた。 0.554

以上の項目から第2因子を解釈し、第2因子を「子供軸」と命名した。また、この8項目を「子供軸トラブルイベント」とする。

【第3因子：仕事軸】

- 固有値 2.17 寄与率 8.4%
因子寄与 3.03 第1~4因子における寄与率 20.1%
第3因子に負荷量の高い項目には、対象者自身の、あるいはその配偶者の仕事に関する項目が主に含まれる。その他、家計や生活習慣における変化もここに入る。第3因子に対する負荷量 0.40 以上の項目として、以下の8つが挙げられる。

- No. 34 夫の職場や、仕事の内容が変わった。 0.556
- No. 35 夫の会社の機構や人事が大きく変った。 0.541
または経営状態が変化した。
- No. 36 夫が退職したり、仕事をやめた。 0.607
- No. 37 共働き（パートを含む）をはじめた。 0.503
または共働きをやめた。
- No. 38 あなたの仕事や家事の内容が変わった 0.440
り、量が増えたりして忙しくなった。
- No. 49 あなたを含めた家族の生活時間や習 0.413
慣、または食生活などに大きな変化
があった。
- No. 52 急に収入が減ったり、増えたりする 0.449
ことがあった。
- No. 62 主婦以外の家族の誰かが病気や事故 0.406
で5日以上寝こんだり、入院したり
した。

これらの項目の内容に基づき第3因子を「仕事軸」と命名した。そして、以上8項目を合わせ「仕事軸トラブルイベント」とする。

【第4因子：居住環境】

- 固有値 1.73 寄与率 6.5%
因子寄与 2.74 第1~4因子における寄与率 18.2%
第4因子に負荷量の高い項目には、各種の動産・不動産に関する項目が含まれる。また、家の周囲の広場、緑、小動物、あるいは親しい隣人の喪失、減少などの項目もこの軸に高い負荷量を示している。つまり、それらは広い意味において自分の家庭の所有物であるとみなせるもの、または所有物とはいえないにせよ、その地域に居住することにより享受できるもの、と考えられる。

以下に、この因子に負荷量 0.40 以上を示す6項目を挙げる。

- No. 5 子供の遊び場や、いつも遊んでいた 0.410
広場や場所がなくなった。
- No. 6 家のまわりの緑や、小鳥、チョウチ 0.452
ョなどの虫が急に減った。
- No. 24 これまで親しかった隣人が引っ越し 0.426

表4 トラブルイベントの軸別平均値

軸(項目数)	<直面群> 平均値(SD) 平均値÷項目数	<対照群> 平均値(SD) 平均値÷項目数	t値 危険率
環境軸(11)	19.56(12.70) 1.78	3.36(5.59) 0.31	14.18 P=0.00
子供軸(8)	5.22(6.78) 0.65	5.37(6.65) 0.67	-0.20 P=0.84
仕事軸(8)	4.69(6.30) 0.59	3.70(5.69) 0.46	1.53 P=0.13
居住環境軸 (6)	4.08(5.41) 0.68	3.04(4.50) 0.51	1.87 P=0.06

表5 生活全般トラブルイベントとCMIの相関関係

	直面群	対照群
生活全般トラブルイベントとCMI	.26**	.21**
環境軸トラブルイベントとCMI	.20*	.10
子供軸トラブルイベントとCMI	.01	.04
仕事軸トラブルイベントとCMI	.28*	.10
居住環境トラブルイベントとCMI	.08	.20**

表6 環7トラブルイベント各軸の平均得点(大へんさ)

	I軸 「振動」	II軸 「外部からの侵入への不安感」	III軸 「音による弊害」	IV軸 「密閉不満感」
直面群	3.86	1.64	2.35	4.84
対照群	1.09	0.23	0.32	0.45

ていった。

- No. 40 家屋や土地の売買のことで具体的な計画がもち上がったたり、実際に売ったり買ったりした。 0.496
- No. 41 現在住んでいるところを新築、改築、増築した。またはその具体的な計画がもち上がった。 0.527
- No. 44 冷暖房の装置を入れた。または冷暖房の仕方を変えた。 0.466

以上の項目の内容の解釈を行ない、第4因子を「居住環境軸」と命名した。そして、この6項目を「居住環境軸トラブルイベント」とする。

なお、第1因子から第4因子までの累積寄与率は56.5%であり、生活全般トラブルイベントの分散の6割近

くがこの4因子によって説明できるといえる。

②生活全般トラブルイベントの軸別平均値は、表4の通りである。対象群の環境軸の平均値が極度に高いことがめだち、他の軸では対象群と対照群の有意差はみられない。

③生活全般トラブルイベントとCMIの相関関係をみると、表5のとおりである。

直面群は環境軸トラブルイベントと不健康度に有意な相関がみられているが、 $r=.20$ (有意差5%水準)とこれまでの調査より低い関係が示された。むしろ、仕事軸のトラブルイベントと不健康度の関係の方が高い値($r=.28$)を示している。直面群は自営業が多く、パブルの崩壊と関係があるのではないかと考えられる。対照群の方は、自分の居住環境でのトラブルイベントも不健康度に関係している。

④環7トラブルイベント8項目について見てみると(この8項目はすでに第6回調査のところで紹介している)、表6のように直面群でIV軸の密閉不満感が最も大へんであり、各軸とも0.1%水準で直面群と対照群に有意差がみられる。

⑤各軸とCMIの相関は直面群におけるIII軸「音による弊害」のみ相関係数 $r=.24$ で1.0%水準で有意であった。なお、環7トラブルイベント項目の中で唯一有意で高い相関を示したのか、「音がうるさくて深くものが考えられないことがあった」という項目であった(相関係数 $r=.30$ 有意差0.1%水準)。

このように、環状7号線のもたらす環境悪化によるストレスが健康状態に及ぼす影響は、生活全般トラブルイベントの中でとらえてみると、環境軸のトラブル量が多いように、生活システムへの混乱は環境との接点でひきおこしてはいるが、前回の調査のように、極めて大きな健康障害をひきおこしているとはいえない。しかし、それでもなお、環境悪化にもとづくストレスは健康面に影響があることは否定できないことがいえるだろう。

⑥なお、CMIの項目で、直面群が対照群に比して有意に高い項目は次の5項目であった。「心臓が狂ったように早く打つことがよくある」(出現率直面群13.8%、対照群5.4%)「ときどき脈が狂うことがある」(20.7%、10.7%)、「人より息切れしやすい」(29.3%、17.6%)、「疲れはててぐったりなることがよくある」(37.9%、26.3%)、「仕事をすると疲れきってしまう」(33.9%、20.5%)、この結果から、心臓系と疲労系の症状が直面群に多いことがみられている。

4. おわりに

環状7号線沿道住民の生活環境ストレスと精神健康の関係を追って10年、実際の調査回数6回(1回は前回データの分析)を重ねてきた結果が上記のようなものである。

生活環境ストレス研究をすすめてみて実感することは、同じ環境に住んでいても、個人差が大きいこと、しかも、人間はどんな環境でもかなりの適応力をもっているということであった。

また環境ストレスの調査そのものが、どうしても、社会調査方式であると、意識レベルに訴え、本人の認知判断過程をとおして把握されるため、その判断過程に調査バイアスがかかることである。それ故、ストレス尺度を修正したり、調査デザインを修正、変更したりで、生活環境ストレスと精神健康度との関係が強くなる場合と厳しく低くなる場合とを考え測定をしてみたのである。

今後は、さらに生活システム内のより具体的な部分で、例えば安眠のような健康に直接影響を及ぼす生活部分の混乱や障害をとらえることで、生活環境ストレス研究の計画をすすめて行こうと考えている。

参考文献

- 青井和夫, 松原治郎, 副田義也, 1971. 『生活構造論』有斐閣
- Dohrenwend, B. S. & Dohrenwend, B. P. (Eds.), 1974. *Stressful life events: Their nature and effect*. New York: Wiley.
- Dohrenwend, B. S. & Dohrenwend, B. P. (Eds.), 1981. *Stressful life events and their contexts*. New York: Wiley.
- Dohrenwend, B. S., Dohrenwend, B. P., Dodson, M. & Strout, P. E. 1984. Symptoms, hassles, social support, and life events: Problems of confounded measures. *Journal of Abnormal Psychology*, 93, 222-230.
- Holmes, T. H. & Rahe, R. H., 1967. The social readjustment rating scale. *Journal of Psychosomatic Research*, 11, 213-218.
- 岩田 紀, 1981. 騒音感受性と性および音響関連反応の関係, 徳島大学学芸紀要 30, 41-45.
- Kanner, A. D., Coyne, J. C., Schafer, C. & Lazarus, R. S. 1981. Comparison of two models of stress measurement: Daily hassles and daily uplifts versus major life events. *Journal of Behavioral Medicine*, 4, 1-39.
- 加藤正明編, 1976. 都市生活における精神健康度に関する総合的研究(昭和47, 48, 49年度特別研究) 科学技術庁研究調整局.
- Lazarus, R. S. & Folkman, S. 1984. *Stress, appraisal and coping*. New York: Springer.
- シザルス, R. S. (林 峻一郎編訳) 1990. ストレスとコーピング, 星和書店.
- 松本 康, 1985. 現代社会の社会変動とライフスタイルの展開, ——生活システム論の視点 思想, 730, 278-300.
- Pearlin, L. I., Liberman, M. A., Menaghan, E.-G. & Mullan, J. T., 1981. The stress process, *Journal of Health & Social Behavior*, 22, 337-356.
- 渡辺圭子, 1982. 住環境と精神健康に関する研究, 建築研究報告(建設省建築研究所), No. 101.
- 渡辺圭子, 山内宏太郎, 1982. 住形態による住環境ストレスの違い——住環境ストレスと精神健康に関する調査, その9. 日本建築学会関東支部研究会報告集, 117-120.
- 山本和郎, 1973. 地域精神衛生からとらえた環境——その影響に関する研究の問題点, 心理学評論, 16, 277-297.
- 山本和郎, 1986. 『コミュニティ心理学——地域臨床の理論と実践』東京大学出版会
- 山本和郎, 1987. 環状7号線と心理的ストレス臨床精神医学, 16(8), 1135-1141.
- 山本和郎, 1989. コミュニティとストレス——地域生活環境システムの影響, 社会心理学研究, 4(2) 68-77.

なお、この論文は、東京都衛生局環境公害保健課委託研究費による、調査にもとづく資料を要約して、調査研究の流れを報告したものである。この論文に関連する報告書は以下である。

- 1) 山本和郎, 山内宏太郎 1983 環状7号線道路騒音に関する心理社会的影響について 昭和57年度東京都衛生局環境公害保健課委託研究報告書
- 2) 山本和郎, 山内宏太郎 1984 道路騒音の邪魔感を規定する心理社会的要因に関する研究 昭和58年度東京都衛生局環境公害保健課委託研究報告書
- 3) 山本和郎 1984 道路騒音に関する心理社会的の研究——深層面接法による—— 昭和58年度東京都衛生局環境公害保健課委託研究報告書
- 4) 山本和郎, 久田 満 1985 環状7号線道路沿線住民と心理社会的ストレス 第1報 ——単純集計結果を中心に——昭和59年度東京都衛生局環境公害保健課委託研究報告書
- 5) 山本和郎, 山内宏太郎, 久田 満 1986 環状7号線道路沿線住民と心理社会的ストレス 第2報 昭和60年度東京都衛生局環境公害保健課委託研究報告書
- 6) 山本和郎, 土屋満明 1987 環状七号線周辺住民と心理社会的ストレス 昭和61年度東京都衛生局環境公害保健課委託研究報告書
- 7) 山本和郎, 土屋満明 1988 環状七号線周辺住民

- と心理社会的ストレス 昭和 62 年度東京都衛生局環境公害保健課委託研究報告書
- 8) 山本和郎, 土屋満明 1989 環状七号線周辺住民と心理社会的ストレス 昭和 63 年度東京都衛生局環境公害保健課委託研究報告書
- 9) 山本和郎, 増田真也 1990 環状七号線周辺住民と心理的ストレス研究 平成元年度東京都衛生局環境公害保健課委託研究報告書
- 10) 山本和郎, 高山 緑 1991 環状七号線道路公害心理・社会的ストレス研究 平成 2 年度東京都衛生局環境公害保健課委託研究報告書
- 11) 山本和郎, 山田良一 1992 環状七号線周辺住民と心理的ストレスの研究 平成 3 年度東京都衛生局環境公害保健課委託研究報告書